



新納忠元物語 二

伊佐市立菱刈郷土資料館 指導員 原田純一

新納氏の出自

(忠元・島津忠良に仕える)

新納氏は、島津本家第四代忠宗の四男時久を祖とする島津家の分家である(前月の新納家×島津家略系図より)。名字の『新納』の地は、日向国新納院(現在の宮崎県児湯郡木城町・高鍋町・川南町付近)であり、建武二年(1335年)一二月一日付足利尊氏下文(旧記前一―一七五三号)により時久に勲功之賞として宛行われたものである。この下文が発給された日は、『中先代の乱』鎮圧を名分として関東に下向した尊氏が、建武政権に反旗を翻した直後で

あり、足利勢が、新田義貞を大将とする追討軍を撃破した、竹ノ下合戦(箱根)の当日である。おそらく勲功とは、この合戦のことであり、島津時久は、尊氏方として参戦しその恩賞として新納院地頭職を宛行われたのである。是より先の文保二年(1318年)に、父忠宗から薩摩国宮里郷(現在の薩摩川内市宮里町付近)地頭職等を譲られている。島津本家から譲与された所領の名字ではなく、敢えて足利尊氏から宛行われた『新納』を名字とした点は、幕府との関係を重視する姿勢が見て取れる。しかし時はあたかも南北朝争乱の時代であり、時久

の新納院支配は、ほとんど実効性のないものであった。新納院高城は、畠山直顕に観応元年(1350年)に攻め落とされ、以後、大隅国救仁院(現在の志布志・松山・有明の東半分の地域)に移ったのである。観応年間のころ救仁院は、榎井氏が志布志の松尾城を本拠地としており、新納氏は名目上の支配者に過ぎなかった。新納氏が実質的な志布志領主になったのは榎井氏が、畠山氏に敗れた後、島津氏の協力を得た新納本家二代実久が畠山氏を撃退した延文二年(1357年)になってからである。しかし、新納家九代忠茂は、飢肥の島津忠朝、都城の北郷忠相、高山の肝付兼統らに三方から攻められ、天文七年(1538年)降伏し、約百八十年間もの長きに及んだ新納家による志布志領有は終わりを告げた。この時、

忠元の父祐久は、親戚の島津忠良を頼って忠元を連れ、田布施(現在の南さつま市)に行つて島津忠良に仕えたのである。

☆次回は『島津軍の菱刈侵攻前編』



〈宮崎県児湯郡木城町とその周辺〉

(参考資料)

- ・室町期島津氏領国の政治構造 新名一仁著 286ページ
- ・川内市史 上巻・昭和五十一年三月発行
- ・志布志市埋蔵文化センター 志布志城跡リーフレット城主編

(※注釈)

- ・中先代の乱・建武二年(1335年)七月 北条時行が鎌倉幕府再興のため挙兵した乱 日本合戦解剖図鑑(本郷和人著)